交河故城の調査

交河故城は、中国新疆ウイグル自治区の都市遺跡で、シルクロード天山南路の要衝トルファンの西方約10kmに位置する。唐代を中心とし、遺存状態が非常に良好な点でよく知られているが、乾燥地帯の厳しい自然環境にさらされているため、部分的にはかなり崩壊が進行しつつある。そこで、ユネスコの文化遺産保存日本信託基金により、1992年から3箇年の計画で保存修復を行うことになった。

計画では、将来にわたる遺跡全体の保存のマスタープランの策定、洪水対策など緊急性を伴う事業、一部を対象とした実際の修復作業を予定している。今回は、昨年の予備調査と概況調査を承けた初の本格的調査であり、当研究所からは伊東太作・佐川正敏・小沢毅の3名が参加した。

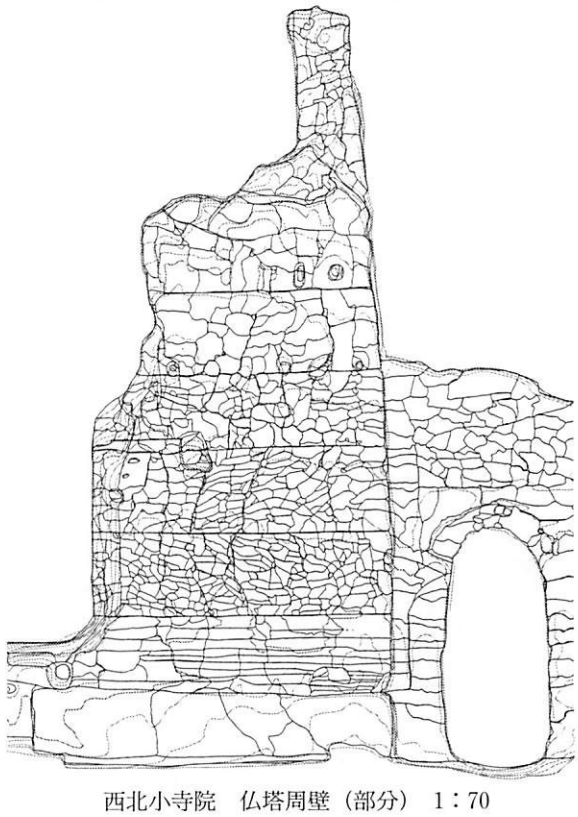
当初の予定では、修復のモデルとして選んだ「西北小寺院」について、復元の資料を得るための発掘調査を、日中共同で実施することになっていた。しかし、諸般の事情から、発掘調査は新疆文物考古研究所が単独ですでに実施しており、日本側のメンバーは、主として発掘後の西北小寺院の詳細な観察と、立面の写真測量・基準点測量を行うにとどまった。

西北小寺院は、一辺約22mの正方形の平面をもつ仏教寺院である。南を正面として、中央北寄りに仏塔をおく。仏塔は、現在では破壊されて痕跡をとどめず、それを囲む周壁のみが残存している。この三方に回廊がめぐり、南面は、一段高い壇となる。東西の回廊の外側には、僧房を配する。僧房の一部は、厨房として使用されたらしく、竈の煙道が多数残る。そのほか、入口の左右には、東西に連続する地下室や、見張り台とみられる施設も備えていた。寺院の壁体の構築は、以下の方法による。1）壁体部分を残して地山を掘り下げる。2）地山上面の起伏をならすため、壁体の上に部分的に版築を加えて、水平な基底面をつくる。3）基底面の上に堰板を設置し、その間に未乾燥の生煉瓦を積み上げる。この作業を壁の全周にわたって繰り返し、それを重ねることによって高い壁を形成する。

また、この寺院の屋根は、向い合う壁の一部を掘りくぼめ、そこを基底として、日乾し煉瓦を芯とする蒲鉾形の天井（ヴォールト vault）をかける構造である。ところが、これ以外の交河故城の仏教寺院の屋根は、ほとんどがヴォールトではなく、垂木による架構方式をとる。そして一部では、垂木からヴォールトへの改変も行われている。したがって、大局的に見て、この地域の屋根架構が、垂木構造の平らな屋根から、ヴォールト構造の蒲鉾形の屋根へと変化したことは疑いない。おそらく、西北小寺院の創建は、交河故城のほかの寺院よりも遅れるのであろう。

しかしながら、こうした建築構造の復原や、実際の修復方法に関して、日中両国の見解が必ずしも一致しているわけではない。それらの相違点については、現地協議の際に日本側の意見として伝え、またユネスコへ提出した成果報告の中にも明記した。今後、両国の研究者による充分な討議と共同研究が、さらに実りある成果を生むことを望むものである。

（小沢　毅）



西北小寺院　仏塔周壁（部分）　1：70